

「河童の詫び状」

(国立歴史民俗博物館第4展示室「おそれと祈り」)



七月はじめ、佐倉の歌人らと歴博に行った。久し振りの歴博は以前とすっかり変わっていて、埴輪ばかりのコナ―はもう無い。

一番面白かったのは第4展示室(民俗)の中の「おそれと祈り」のコナ―だった。日本民族は昔から全ての自然に霊が宿っていると考えるから、天災や自然の驚異に対してそれらを乗り越える為に祈りや祭りを行ってきた。霊は妖怪や鬼、天狗や河童と呼ばれて生活の中に変化しつつ生き続けている。私たちが目にするのは、手賀沼の三体の河童像や絵本のなかのコミカルな河童だが歴博の河童は凄。熊の爪を持ち、アザラシの牙を持ち、皮膚は無数の疣々に覆われていて目は金色だった。

河童像はフィギュアだが、河童の詫び状は本物だった。岩手県北上市の仏国大器和尚が馬を盗もうとした河童に、二度と悪さをしないように「當山」と詫び状を書かせ肋骨の証文印を押させたものが展示されていた。信じられない方はぜひ見学を。

(黒岡美江子)

徳永進著『いのちのそばで 野の花診療所からの最終便』

(朝日新聞出版)



著者が院長を務める「野の花診療所」は在宅ホスピスと緩和ケア医療を行う。彼は総合病院に二十三年間勤務後、二〇〇一年に五十三歳の時、鳥取市内に診療所を開設。今年で二十三年、七十六歳になる。朝日新聞鳥取版のエッセー『野の花あつたか話』は二〇一二年から始まり、すでに二冊発行され、今回が三冊目となる。二〇一九年から二〇二三年の五年間の日々の診療実録がユーモアとあつたかさで綴られる。

『ピンクのお棺』『臨床オノマトペ』『アイシテル』『農婦の底力』『宇宙船の二人』などの見出しで、患者さん、ご家族と医師、ナースとの現場の掛合いなどがウィットを込めて書かれ、様々な臨床と看取りの姿が浮かんでくる。「いのちの姿、死に向かう人たちの健闘を多くの人に知ってもらいたい」との思いに溢れる。病める人、見守る人の気持ちはうつろい、死の前を行ったりきたり。それでも人は死に向き合う力を持っていると著者は言う。「死」とは、「看取り」とは、を考えさせる好著である。(石田信夫)